Roman

著者の了
解により
検印廃止

昭和38年5月10日　第1刷発行

著者　大江健三郎
発行者　野間省一
印刷所　株式会社 常磐印刷所
発行所　株式会社 講談社
東京都文京区音羽町3ノ19
振替東京 3930
電話東京(941)3111(大代表)

夜よゆるや
かに歩め

¥ 210

© 大江健三郎 一九六三

(落丁本・乱丁本はおとりかえいたします)　(藤沢製本)

Roman

やかに歩め

大 江 健 三 郎

Roman Books

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo

裘幀風間

完

夜よゆるやかに歩め

一　章

康男の従兄は前衛音楽の作曲家というより映画音楽の仕事で、自動車や住み心地の良いアパートを手にいれた男だった。そして、そのこと自体は決して悪いことではなかったし、自分でも満足している様子だったが、前衛音楽の作曲の面では二年ほど作品を発表していなかった。それにモツアルトのレコードのコレクションを熱中してやっていた。とにかく良い男だった、康男は従兄を愛していた。

康男が夏の休暇をすごす場所をさがしていることをきくと、自分の方から、一緒に軽井沢で夏をおくらないかといいだし、熱心にすすめるばかりか、それをことわりでもすれば真剣に腹を立てそうなそぶりまで示したのが従兄だった。康男にほとんどむりじいのかたちで招待をうけさせると、従兄は茶色の蝶ネクタイでしめつけた首、硬いくらいに油をつけた品の良い頭に嬉しさをみなぎらせながら、軽井沢で行なわれる音楽祭のことや貸馬のことについてめんめんとしゃべるのだった。康男もじつに楽しい夏が眼のまえにひらけようとしているのだという気持にしだいにひたされていった。

しかし大学の文学部での七月の第二週の授業が終り、出発するまぎわになって、康男は軽井沢で夏をすごすことをおっくうに感じはじめた。そしてかれは出発をのばし、八月に入ってからも暑熱にうだりながら東京の下宿で本を読んでいた。従兄からは憤慨した速達がたびたび届き、康男はそれを無視して、あいかわらず汗を流し吐息をつきながら本を読んだりノオトをとったりしていた。

そのおっくうな感情には原因があったのだ。康男は始め従兄と二人だけで軽井沢へ行くのだと考えていたのに、急に従姉も一緒に行くことになったからだった。康男は従姉の矢代節子とおなじ建物のなかで眠ったり食事したりすることを思うとすっかり気持がくじけてしまうような感じがした。

しかし康男は矢代節子にたいして始めからそういう感情をもっていたわけではなかった、それはしだいに醸成されたのだった。少なくともまだ矢代節子が従兄と婚約中だったころ新劇の期待された娘役で翻訳劇の舞台に立っていたころ、そして映画に入っていくつかつづけて良い仕事をしたころ、そのころの矢代節子を康男は好きだった。従兄の家へいって矢代節子と話すことが楽しかった。ところがこの二年ほどのあいだに事情がごく微妙にかわってしまった。従兄の家を訪ねること、そしてしだいに不機嫌になり陽気さをうしなった従姉と話すことをおっくうに感じ始めるに到った。従兄はそれを気にかけていたが、ただ疎遠になったということだけで、表だったいさかいがあるわけではないので、仲直りということもな

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo

かった。ただ従兄は、弟のようにしてきた康男とかれの妻とが親しくなることをのぞんでいた。こんど矢代節子が仕事のスケジュールのつごうでたまたま夏をのんびりすごすことができることになったとき、従兄としてはこの機会に康男と節子のあいだのこだわりをとりのぞきたいと考えたのかもしれなかった。

八月のなかば近くなってすさまじい暑さと湿度の日がつづいた。康男は死にものぐるいのような感情で、ほとんど裸の躰をベッドによこたえ打ちのめされて汗にまみれていた。そこへ軽井沢からの何度目かの手紙がきて、かれをせきたてた。その手紙はじつに熱心にかれの到来を要請していた。かれは従兄の人の良い笑顔が高原の涼しく乾燥した空気にさらされているのを頭にうかべた。その間にも手紙はかれの躰からの汗にぐっしょり濡れるしまつだった。かれは起きあがり、躰をぬぐい、荷物をまとめて出発した。

軽井沢の蜂蜜や葡萄のジュースを売っている山小屋風の家のまえで康男は従兄と待ちあわせた。そこでは確かに空気は乾燥していたし風もあったが暑いことにかわりはなかった。外国人の足の形の良い子供たちが自転車に乗って走ってきたり、紙細工めいた帽子をかぶった娘たちの一団が通りすぎたりしたが、従兄はなかなか現れなかった。

康男は荷物を舗道の上におろし、それに腰をかけて待った。首筋や胸に汗がふき出たがそれは東京のむし暑い部屋にいる時とはちがって、じつに爽快に蒸発してしまう。そして康男

はしだいに喉が乾いてくるのも感じていた。かれは葡萄のジュースを飲みたかった。もう五分待って従兄が来なかったら、おれはどこかへ入って一リットルの葡萄の果汁をごくごく飲んでやる、そして従兄におれを探しまわらせてやる。

そこへ従兄の車がやって来た。従兄はかれの注意をひくために、そして幾分はおもしろがって、クラクションをやたらに鳴らしながら疾走してきた。

「やあ」と従兄は端正な顔に善良な微笑をうかべていった。「遅れてすまない」

「音楽祭は終ったの？」

「今日からだ」と従兄は車から降りて康男の荷物をつみこむ手伝いをしながらいった。従兄の躰からは香水の匂いがしてきた。

「聞きにくる？」

「行かない」と荷物のあとから車に乗りこみながら康男はいった。

「ふむ、ふむ」というようなことを従兄はいい、車をまわしていた。

「暑いね」

「東京はひどいだろ？」

「ひどい」

「ここもかなり暑いんだ」と従兄はいった。「この暑いのにテニスコートは満員だからなあ」

車は雑踏する人なみをわけて進み、そのあげくもっと雑踏した人なみのなかへ入りこんで

行った。
「節子さんは元気ですか？」と康男はちょっとあらたまって訊ねた。
「ああ、元気だよ」と従兄は混雑する人々を轢かないように夢中になりながら、うわの空でいった。「ロシア料理店で待ってるよ」
「これからそこへ行くの？」
「一緒に食事しよう」と従兄はいった。「それから、ぼくは音楽祭に出る。節子は君と北軽へさきに帰るそうだ」
「北軽？」
「北軽井沢、浅間牧場の向うだ、こんなごみごみした暑いところに一日だって住めるものか」
「ああ、そうか」と康男はちょっと安心して、したがって人ごみを余裕のある眼で見おろしはじめながらいった。
テニスコートの傍までくると、確かにそこは従兄のいうとおりこの暑いのに満員だった。車は狭い路地を折れてすすみ、バンガロー風の料理店の前へ出た。かれらは車を降り、車に鍵をかけた。康男は従兄のせんさいで、しかも大きい指の動きを見守っていた。
「節子は映画の仕事が行きづまっていて、神経衰弱ぎみなんだ。演技賞の話なんかはしないほうがいいよ」と従兄はごく平静な声でいった。「不機嫌になるからね」

「ああ、わかった」
「さあ、食事をするとしよう」とふいに快活な声をあげて従兄は康男に親しい笑顔をむけた。
「ここはおいしいんだからね」
その小さなロシア料理店の高い床にあがり籐をあんだ扉をひらくと、正面の暖炉の前のテーブルにサングラスをかけた矢代節子が坐っているのが見えた。節子は唇をかみしめてそこにじっと坐っていた。傍にたって彼女に話しかけていた外国人のマダムが康男と従兄にあいそよくふりむいても、節子は坐ったままだった。
「まだ食べてなかったの？」と従兄はいたわるようにいった。「一人で終っていてもよかったんだ」
「今日は」と康男はいった。
「今日は」と矢代節子はほとんど唇をうごかさないでいった。「ようこそ」
「従弟です、大学でフランス文学をやっています」と従兄が康男をマダムに紹介した。
マダムがかれにフランス語で挨拶し、おおあわてでかれがそれに答えるのを、黙ったまま節子は見まもっていた。そしてマダムと従兄が声をあげて笑っても、彼女は笑わなかった。この女と一緒にくらすことはおっくうだな、それは思っていたとおりなんだ、と康男は少しうんざりして考えた。

「さあ、これで一家族できあがったぞ」と食事がはじまってから従兄が嬉しそうに力みこんでいった。「楽しくなった」

節子は従兄の言葉にはすっかり無関心で、ボルシチの皿にうつむいて熱中していた。

「楽しくおなりですね」とマダムがいくぶんまのぬけた沈黙をカヴァするためのように急いでいった。

「そうですよ」と従兄は元気よくいった。

康男は従兄たちに気をつかうためには、あまりに空腹だったので、料理に意識を集中した。パン種で醱酵させた果実酒がおいしかったし、料理自体もおいしかった。それで康男は矢代節子があいかわらず放心したような沈黙をつづけているにもかかわらず満足な気分だった。そして従兄だけが食事のあいだずっとかれが音楽祭で行なう講演について話しつづけ、食事のふんいきをもりたてるための努力をするのだった。ほんのたまに節子が相づちをうつと従兄は躰をのりださんばかりにして同じことをくりかえした。康男は従兄に軽い憐憫のこもった友情を感じながら、眼をふせて料理をゆっくりあじわった。結局かれは、従兄の、矢代節子にたいする悪戦苦闘にそれほど興味をひかれてはいないのだった。

食事が終ると四時だった。従兄は四時半からの音楽祭の開会式に出なければならなかった。そこでかれらはいくぶんあわてて料理店を出た。マダムが一人のファンとしての贈りものだといって瓶につめてくれた果実酒と一包みのビスケットもつみこんで、車はまず音楽祭

の会場へ行き、そこで従兄をおろして、運転席に節子が坐った。
康男と節子の車が走り出すとき従兄はじつにきちんと胸をはった良い姿勢で見おくっていた。音楽祭にきた観客たちが、その従兄を見まもっていて、それがきわめて好意的な感じなのが康男にもつたわってきた。車のなかの節子をぶえんりょにのぞきこむ女学生たちもいたが、節子はそれを無視していた。
車が人通りの多い道をはなれ速力をつよめた時、節子がなにかいったようだったが、康男は後部座席にふかぶかと背をうずめて眼をつむっていたので聞きとれなかった。
「え？」とかれは躰をおこして問いかえした。
「北軽はおもしろくないわよ」と矢代節子は冷淡な声でくりかえした。「退屈で死にそうになってるわ」
「困ったな」と康男はいった。
「あなたのようにフランス語の勉強してれば満足な人は困ることないけど」と節子はいった。
「北軽でいやというほど退屈して、それから下へおりてくるとダンスパアティには不良少年がうようよいるんだから」
「それにしても、東京の暑さはすさまじいんだ」と康男はなぐさめるためのような口調でいった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo